

平成 22 年 6 月 11 日現在

研究種目：若手研究(B)  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19791699  
 研究課題名（和文） 望まない妊娠をした未婚若年女性の心理・社会的な包括支援プログラムの作成  
 研究課題名（英文） Psychological and social support to pregnant teenagers who were unmarried and unexpected their pregnancy

## 研究代表者

山元 公美子 (YAMAMOTO KUMIKO)  
 山口大学・大学院医学系研究科・助手  
 研究者番号：40363121

## 研究成果の概要（和文）：

若年妊娠をした初産婦が、日常生活の中で自身の妊娠に適応していくプロセスについて、《妊娠に対する喜びと葛藤の混在》、《家族の児の受け入れ準備》、《脆弱な将来的基盤》、《母親としての我慢》、《母親役割意識の未熟》、《母親としての芽生え》の6つのカテゴリーが抽出された。若年母が育児に適応していくプロセスについて、《子ども中心の生活》、《育児の重圧からの避難》、《経済的不安》、《実母の強力サポート》、《仲間同士の支え合い》、《実家/実母からの巣立ち準備》の6カテゴリーが抽出された。

若年妊婦が母親としての自覚を高めていけるような支援が必要である。

## 研究成果の概要（英文）：

18 pregnant teens ages 16-19 who were getting pregnancy for the first time consented to the study. They were asked to talk about "variety of their life during their gestation period", and participated in a semi-structured interview. Qualitative analysis of the data obtained identified 6 categories: "Mixture of pleasure and conflict for pregnancy", "Acceptance of family members", "The uncertain future", "Patience as a mother", "Immature awareness as a mother", "Awakening as a mother". 13 teenage mothers who were 1 month postpartum consented to the study continuously. They were asked to talk about "variety of their life during child caring", and participated in a semi-structured interview. Qualitative analysis of the data obtained identified 6 categories: "Giving priority to their baby", "Taking shelter from child-care-pressure", "Anxiety about husbandry", "Their mother's powerful support", "Helping each other in teenage mothers", "Preparation to leave their parents' home".

It is necessary to help pregnant teenagers positively accept their experience.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	330,000	2,230,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：母性・女性看護学

## I. 妊娠中の若年妊婦の支援に関する研究

### 1. 研究開始当初の背景

近年、我が国における10代の若年者の間では、初交年齢の低年齢化や複数パートナーによる性交など、性行動の活発化が指摘されている。このような性行動の活発化に伴い、若年者の妊娠が増加し、20歳未満の人工妊娠中絶数は1980年の19048件(4.7%)から2006年の27367件(8.7%)<sup>1)</sup>へと約25年間で2倍程度に増加している。また、出産に至ったケースにおいても、1980年の14590件(0.8%)から2006年の15974件(1.5%)へと同様に増加している。

E.H. エリクソンは、青年期の発達課題として「同一性の確立(アイデンティティの確立)」を挙げているが<sup>2)</sup>、10代で妊娠・出産をする場合、自分自身が成長発達過程にある上に胎児発育という両方のニーズを満たさなければならず、様々な葛藤をするといわれている<sup>3)</sup>。

若年妊娠の9割は初診時に未婚であり<sup>4)</sup>、妊娠イベントが突然に訪れたケースがほとんどである。未婚で計画外の妊娠の場合、本人の教育機会の中断、養育準備不足、経済的支援の不足など、心理・社会的問題を抱えやすい状況にある<sup>5)</sup> <sup>6)</sup>。また、若年妊婦の家庭的背景、状況によりDV(ドメスティックバイオレンス)の誘因、乳幼児虐待のリスク要因になりやすいことが指摘されており<sup>6)</sup>、我が国ではこのような若年妊婦への心理・社会的支援を充実させていくことが急務であるといえる。

また、若年妊娠の多い米国では10～18歳で妊娠・出産した者への支援プログラムが確立しているが<sup>7)</sup>、我が国においては若年妊婦に対する包括的なプログラムはまだ十分に確立されているとはいえない<sup>5)</sup>。我が国における若年妊婦に関する文献は、1990年から1993年の4年間に多く、医師による総説や臨床報告が大半を占めており、若年妊婦の生活面におけるダイナミズムや、そこから生じる心理・社会的な問題がどのように対象に体験されているかについては、まだ十分な実態が明らかにされていない。

予定外の妊娠が多い若年妊婦が、自身の

妊娠生活をどのように受け止めており、どのように妊娠に適応しようとしているかを質的に明らかにすることは、若年妊婦を支援していく上で非常に重要であるといえる。

### 2. 研究の目的

10代で妊娠をした女性が、自身の妊娠をどのように受け止め、日常生活の中でどのように妊娠に適応しようとしているかを質的に明らかにし、若年妊婦の支援について検討することを目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究の主旨を説明し同意の得られた若年初産婦18名を対象に、半構成的面接調査を実施した。

調査期間は平成20年4月3日～平成21年11月16日。

面接内容は対象の基本的属性、妊娠が判明した時の状況、妊娠中の日常生活状況とその変化、胎児に対する感情とし、研究協力者の許可を得てICレコーダーに録音した。

面接時間は1回につき1人約30分～1時間程度とした。

データ分析は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。

本研究の倫理性は、山口大学大学院医学系研究科保健学専攻医学系研究倫理審査委員会において審議され承認を得た。

### 4. 研究成果

研究協力者の年齢は、19歳7名、18歳5名、17歳4名、16歳2名であった。面接時の学業/就業状況は、無職5名、高校生5名、アルバイト3名、その他5名(正規社員、非正規社員、大学生、短大生、専門学校生各1名)であった。面接時妊娠週数は、妊娠初期5名、妊娠中期9名、妊娠末期4名であった。妊娠判明時に入籍していた者はおらず、面接時に入籍が済んでいた者は6名であった。

「若年妊娠をした初産婦が、日常生活の中で自身の妊娠に適応していくプロセス」について、6つのカテゴリーと27の概念が抽出された。

若年妊娠をした女性(初産婦)は、【なんとなく妊娠を予感】しながらも、妊娠判

明が明らかになると経済的なこと、学業のこと、自分の将来について【先がみえない】不安を抱える一方、【妊娠継続への意味付け】を行っており、《妊娠に対する喜びと葛藤の混在》がみられた。

妊娠判明後は【早すぎた妊娠による身内の動揺】があるものの、次第に【家族メンバーの受容の広がり】を感じていた。徐々にパートナーを含めた【新たな家族の構築準備】を始め、《児を受け入れる準備》を行っていた。傍には常に【実母の寄り添い】があり、若年妊婦を強力にサポートしていた。

若年妊婦は妊娠中に【学業/就業との両立困難】を感じ、仕事や学校を辞める・変えるなど【妊娠継続のための学業/就業の軽減】を余儀なくされていた。もともとの経済基盤がない上に妊娠・出産の費用がかかり、また就業を中断することよりさらに【経済的に余裕がない】状況へ追い込まれるなど、《脆弱な将来的基盤》がみられた。

学業や就業を軽減した後は【退屈な妊娠生活】を送っていたが、周囲の目を気にするが故と知識不足のために、【集団指導への参加は消極的】であった。妊娠前からの【不規則な生活を引かず】者もあり、《母親役割意識の未熟》が伺えた。

妊娠経過中は【周りの目を気にし】たり、【友人との関わりの制限】を受けたり、【嗜好品を我慢】し、【辛いマイナートラブル】に耐えざるを得ないなど、《母親としての我慢》を体験しており、【パートナーへの期待外れ】があると、【ふとした時に犠牲感】を感じたり【情緒のゆらぎ】を感じていた。

妊娠経過中は実母のサポートの他、【周囲からのいたわり】、【妊娠した仲間同士の支え】、【父親・夫としてのパートナーへの期待】が妊婦の心の支えとなり、さらに超音波像や胎動自覚で【我が子の存在を体感】することで【妊娠に対するポジティブ化】を行っていた。これらの支えをもとに、若年妊婦は徐々に【自分なりの先の見通し】を立て、《母親としての芽生え》を行っていた。

## 5. 結論

- (1) 若年妊婦が妊娠継続を決定する過程においては、パートナーや家族との相互作用が働いており、肯定的/否定的に関わらず自分なりに妊娠継続への意味付けを行っていくことで、若年妊婦が妊娠イベントを受容する準備を行っていたことが推察された。
- (2) 若年妊娠は、婚姻よりも妊娠が先行するケースが多いため、妊娠判明時には親元で過ごしている者がほとんどであっ

た。そのためパートナー以上に同居している実母とのつながりが強かった。

- (3) 十分な実母のサポートがあることは、若年妊婦の妊娠適応を容易にさせる上で重要であることが考えられた（しかし一部では実母に依存しているケースが見られ、実母の過度な援助は、子どもを産み育てていく若年母としての自立を妨げる恐れがある可能性があり、注意が必要である）。
- (4) 就業中の若年妊婦は、妊娠生活と就業との両立困難を感じていた。労働環境の整備を行い、若年妊婦が経済的困窮に追いやられないような配慮が必要である。
- (5) 全日制や定時制の高校に通学していた若年妊婦は、妊娠生活と学業との両立の困難感から通信制高校への切り替えを考えていた。妊娠生活と両立する手段として通信制高校が利用しやすいと考えており、高校で学業中の若年妊婦への情報提供の1つとなり得た。
- (6) 若年妊婦は母親としての我慢を体験していた。若年妊婦が葛藤や孤立感をもったまま妊娠期間を過ごしていないかどうか、若年妊婦の感情が表出できるよう支援していく必要がある。
- (7) 若年妊婦は集団指導への参加が消極的であるが、世代の違いにより周囲の目が気になること、参加の必要性を感じていないことが理由として考えられ、より参加意識が高められるような関わりや、母親学級開催の工夫が必要である。
- (8) 妊娠したことで得られたポジティブ面を意識化させ、母性意識を高めていく支援が重要であると考えられる。超音波像を見たり胎動を自覚することは、母性意識を促進させる効果があるといわれているが、若年妊婦においても同様な効果が期待できた。

## II. 出産後の若年母の支援に関する研究

### 1. 研究背景

我が国における若年妊婦の心理・社会的支援の充実が求められる中、若年妊婦が出産後に抱える問題について、質的に明らかにされたものは少ない。

妊娠中の若年妊婦の心理的・社会的問題のみならず、若年母が出産後に抱える問題について明らかにすることは、産後の継続支援を行っていく上で非常に重要であると考えられる。

### 2. 研究の目的

10代で妊娠し出産を終えた女性が、育児についてどのように受け止め、日常生活の中でどのように適応しようとしているか

を質的に明らかにし、若年母の支援について検討することを目的とした。

### 3. 研究の方法

妊娠中の調査に協力が得られた若年初産婦 18 名のうち、産後 1 か月までの継続調査の同意が得られた 13 名を対象に、半構成的面接調査を実施した。13 名中 3 名は、都合により電話によるインタビュー調査を実施した。

調査期間は平成 20 年 12 月 15 日～平成 22 年 4 月 12 日。

面接内容は、出産に対する感情、産後 1 か月健診までの育児状況、育児サポート状況、児に対する気持ちなどとし、研究協力者の許可を得て IC レコーダーに録音した。

面接時間は 1 回につき 1 人約 30 分～1 時間程度とした。

データ分析は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。

本研究の倫理性は、山口大学大学院医学系研究科保健学専攻医学系研究倫理審査委員会において審議され承認を得た。

### 4. 研究成果

研究協力者の妊娠判明時の年齢は、19 歳 5 名、18 歳 5 名、17 歳 1 名、16 歳 2 名であった。面接時の学業/就業状況は、無職 7 名、高校生（通信制）3 名、アルバイト 1 名、産休中（非正規社員）1 名、休学中（短期大学）1 名であった。1 か月健診の時点で、13 名中 12 名は入籍を済ませていた。

「若年妊娠をした初産婦が、日常生活の中で育児に適応していくプロセス」について、6 つのカテゴリーと 17 の概念が抽出された。

若年母（初産婦）は出産して退院後、【児の啼泣に悩ん】だり、【夜間授乳の辛さを実感】したり、【睡眠不足に陥り】ながら、《子ども中心の生活》を送っていた。母乳栄養の確立が順調に進むと、児の睡眠時間が延長し、徐々に母親自身の睡眠の確保が可能となっていた。

母乳栄養が未確立のケースでは、母乳不足感があり、【頻回授乳に対する苦痛】を感じて【母乳栄養継続の断念】につながっていた。また、【喫煙行動の再開】、【自己欲求の優先】をして母乳栄養継続を終了しているケースもあり、《育児の重圧からの避難》を行っていると考えられた。また《経済的不安》により【早期に仕事を再開】し、母乳栄養継続を終了させているケースもみられた。

出産後は自分の実家で過ごす若年母が

多かったが、家族メンバーは日中に仕事で不在になることが多く、若年母子は【（日中は）孤立しがち】であった。

産後 1 か月の間、若年母の実母の多くが若年母の食事や身の周りの世話をしていた。若年母の側では【実母が育児の見守り】を行い、時には【実母が夜間授乳の代行】をするケースもみられた。このような《実母の強力サポート》が若年母の身体的・心理的支えとなっていた。

また、若年母は実母のみならず友人からの情報を頼りにしており、若年母同士でメールや対面を通じて【育児情報の交換】をしながら、《仲間同士の支え合い》を行っていた。1 か月健診受診時には、医療者に対し【児の身体症状の心配】を訴え、医療者から情報を得ることで不安を解消していた。

若年母は、夫が育児に参加することで【夫が父親として変化している実感】を持っており、若年母自身も新しい家族形成のために【家事の練習】、【育児技術習得の努力】、【新居の準備】をして《実家/実母からの巣立ち準備》を行っていた。

### 5. 結論

- (1) 児の啼泣に対する対応について困惑する若年母が多く、特に夜間の児の啼泣は困難感を強めていた。児の啼泣時の対処方法について、具体的に指導をしていく必要がある。
- (2) 母乳分泌に問題がないケースにおいても、喫煙の再開や自己欲求の優先を理由に母乳栄養を終了する若年母がおり、母親役割意識の未熟さがうかがえた。喫煙の再開が予想される若年母（妊娠前または妊娠中に喫煙していた母親など）に対しては、あらかじめ喫煙の悪影響について説明し、また母乳栄養の利点についても十分に指導を行っていく必要がある。
- (3) 多くの若年母は、出産後は自分の実家で過ごしており、妊娠中と同様に実母から身体的・心理的に強力なサポートを得ていた。
- (4) 若年母は、実母の他に友人からの情報を頼りにしており、仲間同士の支え合いを行っていた。
- (5) 夫が育児参加することで、若年母は夫が「父親らしくなった」ことを実感し、肯定的な感情を高めていた。
- (6) 若年母は、実家で過ごす間に家事の練習や育児技術習得の努力をしていた。若年母の育児状況を見守りつつ、母親・妻としての自覚を高め、新しい家族形成に向けて自立していけるような支援が必要である。

引用文献：

- 1) 日本子ども家庭総合研究所編：日本子ども資料年鑑 2009，東京，KTC 中央出版，113-162，2009.
- 2) 舟島なをみ：看護のための人間発達学，東京，医学書院，30-31，2009.
- 3) リウ真田知子：若年出産者への保健指導，助産婦のための退院指導マニュアル，ベリネイタルケア新春増刊，197-208，1998.
- 4) 石松直子，木田しのぶ，井ノ口美穂ほか：若年初産婦への看護方法の検討ー若年・有職・専業初産婦の比較からー，日本赤十字九州国際看護大学 Intramural Research Report，2，97-106，2004.
- 5) 河野美江ほか：10代で出産した母における心理社会的困難性，心理臨床学研究，22(1)，83-88，2004.
- 6) 貞永明美：若年出産のうらにあるもの背景と取り組み 大分県の現状と取り組み，産婦人科の世界，58(1)，13-25，2006.
- 7) Horwitz SM: School-age mothers: Predictors of longterm educational and economic outcomes, Pediatrics, 87(6), 862-868, 1991.

Ⅲ. 研究発表、研究組織について

1. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 1 件)

- ① 山元公美子，田中満由美：若年妊婦における生活体験とその思い，母性衛生，49(3)，207，2008年11月7日，千葉

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等

なし

2. 研究組織

(1) 研究代表者

山元 公美子 (YAMAMOTO KUMIKO)

山口大学・大学院医学系研究科・助手

研究者番号：40363121

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし